

あ と が き

『風の大地』という、南米アルゼンチンのパタゴニア地方が思い起こされる。彼の地では、あまりの強風のために大木ですら途中で折れ曲がり成長しているほどである。地球の大気層は、赤道付近では膨張しているが、緯度が高くなるにつれ冷やされて収縮するため大気層の厚さが薄くなっている。そのため、赤道付近で熱せられ上昇した空気は、薄い大気層の極地方面に向かって吹き降りることとなる。特に、北半球と比べて高緯度地帯に陸地の少ない南半球では、遮蔽物がないため、地上・海上まで強風が吹き届く。その荒れ狂うさまは、「吠える40度」「強暴な50度」「号泣する60度」と形容されるほどである。

我々が訪れた礼文島もまさしく『風の大地』であった。強風の中、一見華奢な高山植物が可憐に咲き乱れていた。レブンアツモリソウの人工培養に成功した高山植物培養センターでは、発芽した苗を開花させるため屋外に植えているが、植える場所によって開花の程度が異なるという。強い直射日光や強風は開花を妨げる原因となるそうで、実際に、柵に近い区画の苗ほどよく開花していた。

その後、我々は、礼文島を実際に歩いてみたが、管理地区以外の場所で、幸運にもレブンアツモリソウが咲いているのを目にすることが出来た。(場所は秘密である。)そこは、強風がまともに吹きつけている場所であったので、自然界の仕組みの不思議さを感じ入った次第であった。

なお、礼文島訪問は、折しもレブンアツモリソウの開花時期と重なり、町役場は繁忙とのことのため、同役場には、後日書面により回答をいただく形をとった。また、今回の現地調査は、保護増殖事業が策定されているレブンアツモリソウを主たる調査対象としたが、併せて隣島の利尻島の自然環境の保全状況についても一部の委員により調査を行った。そのため、報告書の表題を、「礼文・利尻報告書」とすることにした。利尻島もやはり相当の強風だったようである。

あの強風の中で毎年花を咲かせている野生の植物は、生来たくましい生命力を有している。我々が徒らに彼らの邪魔をすることがなければ……。

平成14年秋

平成14年度礼文・利尻現地調査報告書 編集長

第二東京弁護士会公害対策・環境保全委員会
副委員長 井 口 敬 明